戦後70年　証言をつなぐ

戦時「弱者」は非国民

「菊池恵楓園」生を問い

「穀潰しが」元患者、社会から隔絶

年代	ハンセン病の歩み	戦争の歩み
1904年		日露戦争(～05年)
09年	菊池恵楓園の前身となる九州療養所など、全国5カ所に公立療養所設立	
29年	全国からハンセン病患者を排除しようとする「無らい県運動」が愛知県を皮切りに始まる	第1次世界大戦(14～18年)
31年	らい予防法(旧法)が制定され、強制隔離の対象を在宅患者にも広げる	満州事変
36年		2・26事件
37年		日中戦争始まる
39年		第2次世界大戦始まる。ノモンハン事件
40年	熊本市の本妙寺周辺の患者や家族計157人が九州療養所に強制収容(本妙寺事件)	日独伊三国同盟調印
41年	「菊池恵楓園」に名称変更	太平洋戦争始まる
45年	菊池恵楓園が空襲	終戦
47年	ハンセン病の特効薬「プロミン」の試用開始	
53年	熊本市で黒髪事件(ハンセン病療養所内の子どもたちの小学校入学をめぐる混乱)。患者隔離政策を継承した「らい予防法」(新法)制定	
63年	全患協(全国国立療養所患者協議会、現在の全療協)が旧厚生省に「らい予防法」改正を求める要望書提出	
96年	「らい予防法」廃止	
2001年	菊池恵楓園の入所者らが熊本地裁に提訴した国家損害賠償請求訴訟で、原告勝訴判決。国の強制隔離政策が断罪され、国は控訴断念	
03年	熊本県内のホテルがハンセン病回復者たちの宿泊を拒否する	

そのころはもう、毎日のように空を行く米軍機を見上げていた。だが、病者である自分たちが標的になるとは、思ってもみなかったという。太平洋戦争末期、ハンセン病患者約1人が強制収容されていた「菊池恵楓園」(熊本県合志市)にも空襲はあった。

1945年5月13日午後3時ごろ。数十機の米軍機は機銃掃射に加え、20発爆弾6発を投下した。6棟が倒壊、防空壕に避難した8人が生き埋めになり、うち2人が窒息死した。旧日本陸軍の飛行場が隣接していた。療養所にとって最初で最後の空襲だった。

白治会役員を務める杉野芳武さん(83)は当時14歳。同室の大人たちと防空壕へ駆け込んだ。静けさが戻り、外に出ると肝が冷えた。爆弾の一つは、杉野さんが生活する寮舎の隣を直撃していた。

その日は午前6時ごろ、近くの結核療養所が空襲を受け、職員6人が死亡していた。その様子を、杉野少年は窓側に腰掛け、眺めていた。隣にいた男性が悲鳴を上げた。「あのちゃー、物干しざおがつういちゃるか」。その男性がやがて廃墟になった。

空襲が終わると、おやっと思った。がれきの中から男性2人がは い出してきたのだ。白刃で滅多刺きたはずだった。

「1人は、両足が義足だった。もう1人は、戦地から戻ってきた傷病軍人。2人は、白ら命を絶とうとしたのではないか。その痛い気持ちが分かるのは、もう少し大人になってからでした」。杉野さんは話す。

☆　☆

ハンセン病は当時「不治の病」とされた。軍部やファシズムの台頭に伴い、日本は日中、太平洋戦争へと突き進む。そんな風潮の中で、ハンセン病患者の強制隔離政策も容赦なかった。

「この非国民、穀潰しが。おまえらがいなかったら、何個中隊が飯を食えると思っているのか」

38年、菊池恵楓園に10歳で入所した上井繁さん(87)は戦時下、軍人から投げかけられたその言葉に唇をかんだ。外出許可を得て、仲間と熊本市内で映画を見て、療養所まで歩いて帰る途中だった。映画は3本立てで、全てが戦争に彩られていた。

「みんなが軍国少年になっていた。心が見えなくなっていたんじゃないですか。お国のために『らしく』とか、ヤミ(闇社会)も増えてね、世の中、随分変わっていくなと」

☆　☆

16歳から青年団に入り、防空壕を掘り、空き地を開墾し、麦やサツマイモを栽培、作業をするうち、感覚を奪われた指は失われていった。食料や薬の乏しさも病状を悪化させた。終戦から5年後、両目を失明した。

闇の長い夏至の中で、戦時下の5年間だけ、年間死者数は100人を超える。戦争をどう思っていたかですか？　うーん、空襲ですかね、国や社会に反発するなんて、思いもつかない時代でしたから」

☆　☆

戦時下、心身に病や障害がある人々や家族は、どんな思いで暮らしていたのだろう。戦場で傷つき、復員した兵士たちの戦後も容易ではなかった。強兵、強者の時代、社会的弱者はそれぞれの「内なる戦場」で、生との闘いを続けていた。

500本の桜が菊池恵楓園を春に染めた。戦後70年、元患者たちはそれぞれの記憶を重ね、薄紅の花をめでた

消えることのない、静かな激情 詠む

園内最高齢105歳 畑野むめさん

園内最高齢105歳の畑野むめさんは、辛苦の人生を俳句に詠み続けた。生明し、耳も遠くなったが、言葉はしっかりしていた

巡り来た春が園内500本の桜を染めた。入所者1最高齢105歳の畑野むめさんは、歌人としても知られる。視力を失い、耳も遠くなったが、張りのある声と朗らかな人柄は今も変わらない。一人の人間として、女性として、波乱の人生を歩んだ。戦後70年、その心に映る後の風景は。3月末、車いすで花見に出掛けたむめさんに同行した。

「気持ちがいいなー。外の空気は違うよ」

大分桜きの桜並木が広がる。その様子を、車いすを押す女性職員が耳元で伝えるとむめさんは、サクラ、サクラ」と喜び始めた。

「昔は、正門から入って、行けども行けども桜だった。若いころは、一本桜を眺て、花の下で踊りました。きょうは快晴だなぁ」

一帯は戦前、ヒノキ林だったが、施設増設に伴い、桜が植えられた。あの空襲でも、桜たちは木風雪と被害を受けながらったという。

「ここは、どこまで行っても平らで、坂がないでしょ。鹿児島から来た友達を自転車の後ろに乗せ、案内したもんです。こんないい所はありませんと」

そして、ぽつりつぶやいた。「でも随分、人がたくさんなった」

☆　☆

〈昭和六年風呂敷包さげて来し
二十二歳の旦暮なりき〉

熊本県で生まれ、女学校に入学後、病状が進み、教え22歳で入園した。翌年に結婚。元教員だった夫に誘われて作歌を始め、1936年に園内の短歌会「檜の影」に入会した。

〈古里をこふるりのきはまれば
やがて夫は病没。悲嘆してくれていた男性と再婚しようとしたが、患者自治会が認めなかった。抑行手一つをそれぞれ預け、解放落ち。同じ療養所、星塚敬愛園(鹿児島県鹿屋市)に身を寄せるが、すぐに追放。生家に身を寄せる。戦争が激しさを増す43年ごろ。弟たちは出征されていた。

〈三人の男の子征きしと舌思ひ
母が供える晩酌を見つ〉

身ごもっていることが分かった。療養園に戻ると、逃走患者として厳重な手術を受けた。大分県の生家に戻っていた男性は応召。一男方に行くとの手紙が最後だった。

〈三十四の時みごもり子の未来
思ひ苦しみ産まざりにけり〉

これまで4冊の歌集を出版。歩みを身辺を日記風に詠んでいる。62年に出版された初の歌集には、戦前から年ごとに約500首が収められているが、終戦の年に詠んだ短歌はない。後にこんな一首を詠んでいる。

〈戦時下の涙の知き太刀のてハンカチ洗ひ人を恋ひにき〉(母が亡くなった73年)

☆　☆

終戦の年の暮れ、2度目の結婚。男性には前妻との間に生まれた3人の子どもがいたが、食べ物がない。戦後は、外地から引揚げてきた患者も増え、食糧難はますます悪化した。実家に頼んで送ってもらうこともあるが、運べて持てない。妹が運搬を手伝ってくれた。高さ約2メートルの隔離塀を乗り越えると、妹が言った。「あらぁ、姉ちゃん目が口もないところにおるよな」

〈隔離塀高くとも空には及ばず
七十五年を仰ぐ火の燃ゆる山〉(2006年)

入園から75年、熊本県内のホテルが03年、ハンセン病回復者の宿泊を拒否した騒動は重なっている。「人間がつくった差別なんて、雑大な自然から見たら、大したことじゃない」。むめさんはかつて、本紙記者にそう話している。

差別や偏見、その愚かさを母のように諭している。戦争についても、そんな捉え方だったのだろうか。

「うらしく戦争を続けるのかと、だから、戦争が終わったとき、とてもうれしくて」。知人らを介した取材は、そんなやりとりが続いっぱいだった。

☆　☆

むめさんにとって、戦争とは何だったのだろう。地元の現代歌人は、歌集からこんな心境を感じ取る。

〈八月のカレンダーにも向かはずに痛む目をとぢる日は眠らず〉

「8月への思いは共有のものだが、作者ははっきりと拒否を表明している。カレンダーの高間で、痛む目を閉じ、鎮魂のために祈ることとしているのだろうか。消えることのない、静かな激情が伝わってくる」(和田周子さん、79歳)

〈短歌会場ビル七階の入口に掲
まるるとは思はざりし〉

「地元で1997年に開催されておられたのかもしれない。厳しい人の心を感じる。戦争とはいべようもないが、ハンセン病はそれほど尊く、過酷だったと気付かされる」(佐藤孝子さん、73歳)

☆　☆

むめさんは、97年の終刊まで中央歌壇「アララギ」の会員であった。その編集所了人だった土屋文明(90年死去)は、療養園にも何度か足を運び、歌を批評した。

「うそは言わないで、本当のことだけを残しなさい」。むめさんには「土屋先生」のそんな言葉が残る。アララギの根幹「写生」をかみ砕いている。

文明は東京空襲で40年、住家を失い、郷里の群馬県に疎開した。当時、こんな一首を詠んでいる。

〈少数にて他に少数にありしかばひとり心苦しき時代にけり〉

少数、弱者だからこそ、見えていた戦争があった。辛苦の時代にあっても「ひとり心」(自己)を忘れまいとする強靭。むめさんの短歌からも、そんな歌声が響いてくる。